

Text: Ken Nishikawa Photo: Chris Taylor



パンク・ムーブメントが最高の時を迎えていた70年代後期、チープな録音機材とテープ・コラージュを武器にデビューしたフライング・リザーズ。楽器を操る技術がなくとも、ましてや楽器すらなくとも音楽を作り出せることを世に知らしめたその功績は大きい。昨年、幻の4枚目の作品『the secret dub life of the flying lizards』を15年の時を経て発表したデヴィッド・カニンガムの自宅スタジオを訪れ、独自の音楽観を聞いてみた。

「マナー」は モンタージュ作品と言えるだろう

◆近年フライング・リザーズ（以下F.L.）の再評価が高いことについてどう思われますか？

◆戸惑いを感じるね(笑)。しかしF.L.の最初のアルバム2枚を手に入れられるのは、世界中で日本だけなんだよ。F.L.はナンバー・ワンになったレコードなんて1枚もないし、「マナー」(注①)のシングルも7千枚くらいしか売れなかったんだよ(笑)。結局カルト的なレコードだったんだ。

◆F.L.はあなたのソロ・ユニットだったんですか？

◆F.L.が僕の音楽そのものと言ってもいいんじゃないかな。架空のグループ名を使用することにより気分が軽くなるのさ。僕はセッション・ミュージシャンにやりたいことをやらせて、ただ様子を見ていたんだ。一切コントロールというものをしなかったんだ。とにかく何でも録音して後で使えるものを拾い集めていった……編集したり、テープを逆回転させてみたり何でも試したのさ。

◆なぜそれだけレコード会社の制約に束縛されない音楽制作ができたのですか？

◆予算だね。レコード会社に制作費を一切請求しなかった。そこにあるTASCAMの1/4インチの4tr MTR、A-3340とミキサーだけで録音していたんだ。現在リミックスを制作中なので、音をMacintoshのハード・ディスクに流し込んでいるけどね。「マナー」は、まず4tr全部にリズム・トラックを入れ、ステレオにピンポンしてボーカルとギターを録ったんだ。リズムに4tr必要だったのは、ドラムを同時にプレイできなかったからさ(笑)。

◆あなた自身がドラムをたたいていたのですか？

◆「マナー」はそうだね。あの曲は音楽材を接続して作り上げたモンタージュ的作品なんだ。ハットのパターンはレゲエの曲から拝借したものだし、スネアのパターンは「レッツ・オール・チャント」というディスコの曲からいただいた。変なピアノの音は、ジョン・ケージの「プリペアド・ピアノ」そのものだよ。それにあの変な音は意図的にやったわけじゃないんだ。ピアノも安物のマイク1本でEQなどで加工するのではなく、ピアノの調律を変えて欲しい音を作り出したんだ。

現在のアンビエントとF.L.の違いは 流行とのつながりだけじゃないかな

◆音楽を活動始める前は何をしていたのですか？

◆多くのミュージシャンと同様アート・スクールに通っていた。オーディオ・ビジュアル科で学んでいたのだが、音楽よりも映画の方が近い存在だった。そのころ何となくポップ・ミュージックに魅かれ、朝にテープ・レコーダーに録音したロックらしい曲を変形させ始めて、その晩には今言うグランジっぽい、エレクトリック・アコースティックな作品を作っていた。当初音楽とアートは切り離して考えていたが、それが混ざってきたんだ。

◆F.L.の音や音楽との距離感は、現在のアンビエントやテクノ、ハウス・ミュージックに脈々と受け継がれていると思うのですが……。

◆それらの音との違いは、流行とのつながりだけじゃないかな(笑)。実際にCDとして再発売された作品を聴いて驚いたのは、未発表のトラックが収録されていたことだ(注②)。アンビエントな曲にエスキモーのテープの音をかぶせたものだけど、どうして手に入れたのか見当がつかないんだ。そ



『the secret dub life of the
flying lizards』

The Flying Lizards

(piano501/輸入盤)

David Cunningham

David Cunningham's Studio



デヴィッド・カンニング・スタジオの中核となるコンソールSOUNDTRACS 16・8・16とAPPLE PowerMacintosh (型番不明) のディスプレイ。インタビュー中にもあるようにDIGIDESIGN Pro Tools IIIを使用して、過去の音楽素材をリミックスしているということ。コンピューターはほかにATARIや左端に見えるAPPLE IIeも現在使用しているようだ。コンソールの上にはSONY PSU/Beta VCR、SONY 701-ES、FOSTEXのDATレコーダーD-25が並ぶ。その下のラックにはDRAWMERのノイズゲートDS-201、YAMAHA EM10、ALESIS Micro verb、SONYのコンパクトDAT TCD-D3などが雑然と置かれている。また写真にはないが、マスター・キーボードはCASIO HT700を使用している。テープ・レコーダーの数に比べて、ほとんどシンセサイザーと呼べるものがないのは、いかにもデヴィッド・カンニングらしい



隙間の空いたラックの上にはMXRのグラフィックEQ、そしてYAMAHA SPX900、ROLAND SDE-3000A。そしてその下の緑色のオープン・リールREVOXの2trレコーダーB77が隠れる。そして「マネー」をはじめとしたファーストのあのサウンドは、すべてこれによってトリートメントが施されたというシンセサイザーEMS SynthA、そして文中にもあったTASCAMの4tr MTR、A-3340が並び



ラックの上には現在使用されているかは定かではないオープン・リール類がインテリアのように並べられていた



床に並べられたコンパクト・エフェクターの数々。BOSS CE-1、OC-2、DF-2、CS-2、EUROTEC Micro phaseなどが使用されている

この棚の上にあるマスターが「世界唯一のはずなんだが(笑)」。この曲は81年以来聴いたことがなかったが、今聴くと現代的に思えるね。共通点としては、現在ミュージシャンにとってアイデンティティの重要性は薄れつつあるが、当時の僕もアイデンティティなんてどうでもよかったんだ。F.Lはグループであって、グループではなかった。今、似たようなコンセプトのバンドが多くあるが、たまたま時間的に早く存在したというだけさ。

※昨年、10数年前に制作したF.Lの4枚目のアルバム「the secret dub of the flying lizards」を発表することになったいきさつを教えてください。

◆一言で言えばタイミングかな。このレコードはヴァージン傘下にあったフロント・ラインというレーベルから当時発売される予定だった。当時フロント・ラインは、ナイジェリアなどでアルバムを出せば1万5千枚くらい売れていたのだが、80年軍事クーデターがあって、輸入制限品の中にレコードが含まれてしまったんだ(笑)。それでレーベルをたまたざるを得ない状況に追い込まれたんだ。その後、ほかのレーベルにあたってみたんだが、今じゃそんな風には思えないだろうけど、この作品は実験的なものとしてとらえられていたんだ。結局プレス寸前で発売中止となったわけさ。それを2年前このスタジオに引っ越したとき見付け、聴いたんだ。ちょうどそのころ83年に作った映画のサントラ「GHOST DANCE」を発売する話があって、僕のほかの作品はないかと聞いてきたんだ。僕はこの作品を含めて、未発表の音源がアルバム10枚分くらいあるよと答えたよ。それらもこの2、3年中にはリリースしたいと思っている。

※当時ダブのどこに魅かれてこのような作品を作

ったのですか？

◆テクノロジーの発達が僕のような人間に音楽を作るチャンスを与えてくれた素直な反応だね。今でもその意識は作品の中に生き続けていると思っている。僕の作品は、機材に何かやらせているというより、機材にやらされて出来上がっているというもいものなんだ。とにかくやってみてスピーカーから面白い音が出てくるのを待とうって感じさ。それをまた加工する。今ならサンプリングしたりもするね。

※現在はサンプラーも使っているんですか？

◆GREEN GATEっていう古いイギリスのもので、初期のAKAIのサンプラーのようなものだ。現代の水準からすればお粗末なシモノだよ。でも“わざとらしいサンプル音”ってのも個人的には好きなんだ。一聴しただけで何のサンプルかわかるってアイデアも好きだしね。



ノイズ・ゲート・システムは拷問に近いものだと思うよ

※最近の音楽活動について教えてください。

◆テレビや映画のサントラのプロデュースがメインだね。一時期プロデュース業に追われていたの自分の作品がリリースできなかったんだ。ほかのミュージシャンといってもほとんどマイケル・ナイマンだけだね。そのころ段ボールの中には、アルバム3枚分にあたるマイケルの未発表テープが入っているんだ。

※プロデュースする基準はありますか？

◆もしその音楽が好きじゃなかったら、絶対指一本も触れたりしない。それが最終的にマイケルとの間で問題になっていたんだ。

※現在も使用しているノイズ・ゲート・システムについて教えてください。

◆「サイレンス」(注③)に収録されている「the listening room」がその好例と言えるだろう。これは音響の優れたスペースで、マイクとアンプ、ノイズ・ゲートとラウド・スピーカーを使用して録音された。まずフィードバックを発生させる。その音量が一定のところまでくると、ゲートが音をカットするために音が反響しながら減衰していく。そして音がなくなるころ、再びフィードバックが発生するというものだ。スペースに大きく影響されるし、表でタクシーがクラクションを鳴らしただけでも音楽は変わってくる。楽器を一切使わずに作った音楽……というより音響そのままだが楽器になるといった方が正しいかな。これをDATで録音し、違った時間に録音したものと重ね合わせたんだ。同じ部屋だからハーモニー的に近いキーンが生まれるため、面白い効果が得られるんだ。

※このパフォーマンスの予定はないのですか？

◆スタッフのことを考えると気の毒だと思ったんだ。こんな音5時間も聴いていたら頭がどうかなってしまう(笑)。ミュージシャンは聴き手に対し、責任を持たなければならない。これを長時間行なうことは、かつてイギリス軍が行なった大音量による拷問と一緒だよ。この際に使用したと言われる音がデビッド・トゥープのCDで聴けるよ。

※最後に今まで自分の作品の中で最も気に入っているものは何ですか？

◆「マネー」と「the listening room」だね。「the listening room」は僕の前衛的な部分を表し、「マネー」は最もポップな部分の表出だ。今聴き返してもやっぱりいいと思うね。

(注①) ファースト・アルバムに収録されたR&Bのスタンダード曲(ビートルズやストーンズのカバーでも知られる)。中途半端なリズムにやる気のないボーカルが話題を呼んだフライング・リザードの代表曲

(注②) セカンド・アルバム「フォース・ウォール」(東芝EMI: VJCP-17502)にボーナス・トラックとして収録された「グライト」

(注③) 日本のSPIRAL制作の「J・O・リリーやデレク・ジャーマンなど11人のアーティストによるオムニバス・アルバム (NEWSIC: 36CD-N020)